

## [エッセイ] 私たちのドイツ留学体験記

その他のタイトル	[Essays] Unsere Erlebnisse in Deutschland
著者	岡本 啓一郎, 真川 菜央, 前原 早百合, 楠本 尚子
雑誌名	独逸文学
巻	55
ページ	79-86
発行年	2011-03-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00018021">http://hdl.handle.net/10112/00018021</a>

[エッセイ]

## 私たちのドイツ留学体験記

### 1. 岡本啓一郎：仲間

「友人が少ない。」そう思いだした頃、私の留学は本当の意味で始まり、加速し、燃え上がり、そして燃え尽きました。

留学の前半、「誰にも負けたくない。誰よりもドイツ語が上手になりたい。」その漠然とした目標ひとつで一心不乱に机に向かいました。凝り性な性格にも拍車がかかり、気が付けば朝家を出てから、夜は日をまたぐ頃まで大学に残って勉強していました。そういう生活を週5日、半年間続けていたので、自然と外出する機会は減り、友人を作ることに時間を割くことをあまりしませんでした。授業で一緒だった人たちとは顔見知り程度で、街ですれ違っても挨拶をするだけでした。しかしそんなことがある度に、やがて「友人が少ない」と心寂しい気持ちになり、数少ない友人の小さな輪の中に収まっていけないのだろうかと不安になってきました。

そんな中、「始まり」のきっかけを与えてくれたのは、奇しくも半年に一回行われる「クラス分けテストの無残な結果」でした。上に書いたように、勉強の虫となって半年間一心不乱に勉強したつもりでしたが、結果はB1（中級下）のレベルのまま変わらず、勉強の成果を示すことができませんでした。語学習得の難しさを本当に痛感し、その日は悔しい感情で一杯でした。

その日を境に、それまでやらなかったことをやろうと思いつき、生活は一変しました。それは前期にはできなかった「友人」を作ることでした。前期の「勉強の虫」から、後期は「遊びの虫」へと劇的な変化を遂げたのです。この時点から私の「留学」が「加速」していきました。そこで大きなファクターとなったのは3人の隣人でした。

当時、私は学生寮で4人用のシェアルームにイタリア人男性とイングランドとスペインの女性と一緒に一年間住んでいました。前述したよう

に、留学前半は外出する機会があまりなかったのが隣人との関わりが少なかつたのですが、後半は、自らが積極的に話かけ誘うことで世界はどんどん広がっていきました。留学後半は一転して時間の大半以上を彼らと過ごし、同じ食卓を囲んで食事をしたり、また全員そろって外出をしたりすることもしばしばありました。家に帰ると、みんなが「おかえり」と出迎え、外出するときには「行ってらっしゃい」と送り出し、些細な言葉ではあるけれども家族のような一体感ができました。悩みがあればお互いに打ち明け、楽しいことがあれば共有しました。そうやって生活していくうちに、家に遊びにくる彼らの友達とも仲が深まるようになりました。

週5日の前期の勉強は後期にはホームパーティーに代わり、その後居酒屋を飲み歩き、お酒のシメにはケバブ（トルコ風サンドウィッチ）に食らいつき、幾度となく朝日が昇るまで友人と一緒に過ごしました。さらに、同じ趣味を持った者同士でスポーツに没頭するなど、驚くほど多種多様な友人ができました。共有する経験や時間が多くなるほど、意見の相違や文化の違いなどから言い争うこともありましたが、それを乗り越え、理解し、受け入れた時にはお互いがかけがえのない仲間としての意識が芽生えていました。その産物として、彼らが私にしてくれたサプライズの誕生日パーティーや、一緒にした国内旅行や北欧旅行の思い出は私の宝物です。

しかし、留学にそういった「燃え上がる」時期があれば「燃え尽きた」時期があったのもまた事実です。貴重な時間を一緒に過ごした仲間達が国へ帰っていった後、私は放心状態でした。彼らのいない町に私が滞在すべき理由は見当たらず、また魅力も感じませんでした。「一刻も早く」というわけではありませんでしたが、帰りたい。という気持ちは日に日に強くなっていきました。それほど彼らとの共有した時間や経験が自分の中で大切だったのだと、心から思いました。それは机に向かってする勉強では得ることのできないものでした。

最後に、一年間の留学を振り返ってみて「後悔」は全くありません。常にベストを尽くしてきました。ドイツ語は設定した目標には到達できなかったけれど、それ以上にゲッティンゲンの街で知り合い、国境を越えて「仲間」となれた人たちがいることに誇りを持っています。

ゲッティンゲンで出会えた仲間、両親を始め留学を最後までバックアップしてくれた人たちに感謝し、この交換派遣留学で得た経験を活かしながらこれからも日々邁進していきたいと思います。

## 2. 真川 菜央：留学を経た私を振り返って

私は2009年9月から2010年8月、ボーデン湖畔に位置するコンスタンツ大学で交換派遣留学生として一年間を過ごしました。予想していた事、していなかった事、色々ありました。

最初の半年は、慣れるのが大変でした。その中でも一番つらかったのは、やはりコミュニケーションでした。留学当初はドイツ語どころか、世界共通語である英語すら話せない状態での渡独。リスニング力に関しては日本人の大学生の平均すらなかったと思います。着いた初日はなんとか寮にたどり着いたものの、その後は、自分がこれから一年もの間を無事に過ごせるのか、不安の連続でした。まずは電車のホームが分からない。聞いてはみたものの、駅員に書いてもらったメモの数字が読めない。日本で確かに習った筈なのに、単語の意味を思い出せない。ヨーロッパの大学生は簡単な英会話くらいなら出来ると思っていたのに、英語をドイツ語読みされてしまって何のことか分からない。寮のルームメイトの言葉が上手く聞き取れない…。元々自信があった訳でもなく、こんな事でちゃんとビザを取れるのだろうかかと不安な気持ちになりました。

大学の授業形式にも、始めはなかなか慣れることが出来ませんでした。ドイツの学生は授業中積極的に発言するとは聞いていましたが、日本人の感覚から考えて、手を挙げて発言する学生なんてクラスでもせいぜい数人だろうと思っていました。ところが実際には、アジアから来た数人を除いたほとんどの生徒が我先にと発言する様子には圧倒されました。それも、疑問点を質問したり話題を更に掘り下げたり、とても積極的な姿勢で、私語をする学生はいません。日本の大学が教育重視なのに対して研究重視であるといわれる理由に納得する事が出来ました。確かに慣れるまでの間は大変でしたが、一番成長出来たのもこの時期でした。私と同じ程度のドイツ語を話せるアジアから来た友人は、偶然かもしれま

せんが同じくらいの英語しか話せませんでした。それならドイツ語を話した方が良さだろう、ということで、周りが英語を使って会話している中、私はドイツ語で通しました。よく英語圏以外の国へ留学したのに英語の方が上達してしまったなんていう話を聞きますが、私自身は、確かに英語の力も上がりましたが、そういった事はありませんでした。

ただ、留学した時点で（英語であれドイツ語であれ）もっと語学力があれば、更に多くの友人が出来ていたかも知れないと思います。英語を使って会話してくる相手とは、英語に対するコンプレックスで交流を持つことにしり込みしてしまったように思います。

ようやく慣れて来てからは、自分なりに色々なことを経験してみようと、いくつかのことにチャレンジしました。日本という国に興味を持って関わって来てくれる人たちが多く、話をしやすかったというのがあります。

アジアから来た人以外ともかかわるようになった中で感じたのは、やはり日本という国はあまりよく知られていない事、そして自分自身も日本についてそれほど知っているわけではないという事です。本屋で売っている日本のガイドブックは他国のものと比べて種類が少ないうえ、古くて読みにくいデザインのものばかりでしたし、日本人は皆着物を自分で着られるものだと思われていたりしました。また反対に、日本の伝統文化について詳しく聞かれて答えられないこともありました。

留学して一番良かったと思ったのはこの点を確認できた事だと思います。私がいいたい何を知っていて何を知らないのか、そして何に興味を持っているのか。普段は忙しさにかまけてしまって目を向けなかったことがはっきりと分かりました。

この一年は、私にとっては、これから先の将来に何をしたいのか、そのためには何をすべきなのかを改めて考えるための時間だったと思います。

### 3. 前原早百合：ドイツに留学して

2009年8月からドイツのケルンに一年間留学しました。家族や友達か

たくさん居る日本を出て、知り合いもほとんどいないドイツに住むということは私にとって大きな環境の変化でした。寮ではさまざまな国から来た方と同居し、生活習慣の違いに戸惑いを覚えたことも多くありました。日本で当たり前前に食べていた食事も、調味料や食材がなく作れなくなったり、毎日の食事に苦勞したことも今となってはいい思い出です。ケルンは市内交通がよく整備されているので、通学や移動には便利でした。時間のある時は友達とカフェに行ったり、州内を観光したりしました。クリスマスマーケットやカルネバルなど、ドイツの有名な行事も体験することが出来ました。また、授業のない期間にはドイツ国内外を旅行したりもしました。旅行に関しては、子供の頃ヨーロッパに数年滞在したこともあってそれほど不安はありませんでしたが、目新しく感じられることが少なかったのが少し残念でした。しかしそれを差し引いても、新しい体験がたくさん出来たと感じています。

旅行や文化的な活動は大変魅力的で、私の留学生活を大きく充実させてくれたように感じます。しかし、私にとって一番新鮮で魅力的だったのは、やはり大学のプログラムだったように思います。海外の大学での講義を受講するのは初めてでした。大学が提供している語学コースは留学生のみで構成され、同じように世界の国々からドイツまで学びに来ている学生たちと机を並べました。私のドイツ語は不自由だったので、留学した当初の冬学期は語学コースを主軸に据えて、ドイツ語の学習に励みました。語学コースは参加型の授業で、しっかり学習も出来、楽しいと感じる事が多かったです。その傍らで、留学生でない、つまり基本的にドイツ語を母語とする学生の出席する通常授業にも参加しました。冬学期はドイツ語での授業を受講してもわからないのではないかという懸念から、英語の講義ばかり受講していました。夏学期になると一転して、語学コースに通いながら、ドイツ語学を中心としてドイツ語で行われる講義にも登録し、受講しました。授業の内容は興味深く密度の高いものばかりで、とても理解の追いつかないもの、復習をしても理解できないものが多かったです。先生の話していることが上手く聞き取れなかったり、ノートを取るのが追いつかなかったり、文献の内容が理解できなかったりと、様々な問題に突き当たりました。正直に言って、現地の学生とのレベルはかけ離れていたように思います。この点について留学中、

また今でも一番悔しく思います。こんなにも理解できないのに授業に出席するべきなのか、それぐらいならドイツに居る時しかできない交流などをすべきか悩んだこともありました。しかし、自分は学ぶためにドイツに来ているのだから、少しでも理解出来るように努めようと思いました。意欲溢れる現地学生を見て触発された部分もありました。そして、補講に出席することで、少しは自分なりに理解を深められたように思います。語学コースのクラスメイトと比べると私は大学にいる時間が長く、平日にパーティや遊びなどにはあまり行きませんでした。その分学習面で身につけた事もあると思います。

この一年間で、自主性や自分で行動することの大切さを実感しました。海外に限ったことではありませんが、しっかりと、そして楽しんで暮らす為には、やらなくてはならない事をきちんとこなす自律性と、可能性を広げるために自分から行動することが非常に大切だと思いました。私にとって一人暮らし、海外暮らし、海外の学校はそれぞれ初めてではありませんでした。しかし、これまでは困ったときは家族や友達に助けを求める事が出来たし、周りに居るのは日本人がほとんどでした。そういった意味で考えると、この度のドイツ滞在では、環境に適応して積極的にやっていくために自身の主体的な努力がとても重要でした。

今振り返ってみるとわずか4ヶ月前のことなのに、すでに懐かしいと感じます。ドイツで過ごした一年間はとても濃く、楽しく、そして私を大きく成長させてくれたと感じています。大学在学中にドイツに留学する事が出来、本当に恵まれていたと思います。一年間で得た語学力や知識、価値観を基盤に、そして滞在中に感じた悔しさをバネにして、今後の勉学や生活に生かしていこうと思いを新たにしています。

#### 4. 楠本尚子：留学生活の中で感じたドイツ文化

時が経つのは早いものだとよく言ったもので、ドイツに来てから既にはや五か月が経とうとしています。季節は夏から秋、そして冬へと移ろい変わりました。この五か月間、実に様々な出来事があり、そのどれもが新しい体験でした。初めての一人暮らし、毎週開かれる学生達のパー

ティー、日本語のないドイツ語のみでの授業、ドイツ最大の祭りとも言われるオクトーバーフェスト（ビール祭り）、伝統的なクリスマスマーケット、ホストファミリープログラムに参加して体験した、ドイツ人の家庭で過ごしたクリスマス、大晦日、そして新年。そのどれもが、日本では味わうことができなかつた貴重な経験だと感じています。こちらに来てから、日々強く感じることはやはり、日本とドイツの文化、慣習、考え方の違い、つまりはカルチャーショックです。

特に面白く感じたのが、クリスマスから新年をホストファミリーの元で過ごした時のこと。こちらでのクリスマスはやはり本場だけあって、どの家もクリスマスツリーがあり、素敵な飾り付けをしています。クリスマスプレゼントはクリスマスツリーの下に全て置かれ、私のホストファミリーは子ども達だけでなく、私と子ども達の両親も含め、皆にプレゼントがありました。ちなみに、こちらのクリスマスは24日から26日までで、家族だけで、あるいは親戚を呼び、主に身内だけで過ごします。私のホストファミリーは、24日は自分の家で、それから25日と26日は親戚の家を訪ねました。そしてとにかく、このクリスマス期間は食べて、食べて、常に食べています。豪華な食事の他に、ホストファミリーの親戚の家を訪ねた時などは、私のホストマザーを含めどの家族のお母さんも手作りのケーキを作ってきて、その大量のケーキを皆で食べました。ドイツ人たち自身も、皆、この時期は食べてばかりで太ると認めているほどです。そして大晦日。ドイツと日本の文化の違いを最も強く感じたのがこの日です。大晦日は、ホストファミリーの元に大勢の友達とその子ども達が集まりました。そしてフェットフォンデュという、この時期に食べるらしい料理を食べ、皆それぞれに話しをしたりして時間を過ごします。それからいよいよ新年に変わるといふ時に、外に出ます。皆でラジオのカウントダウンの声を聞きながら、新年に変わった瞬間、色々な方向から花火が打ち上げられます。どの方向からも盛大に花火が打ち上げられ、とても綺麗でした。私達も小規模ながら、打ち上げ花火や、日本という線香花火をしました。日本では夏にしか花火をしないとすると、逆にドイツではこの新年を迎えたときにしか花火をしないと返されました。日本では、大晦日は家族で静かに過ごすのが普通です。しかしドイツでは、クリスマスは家族と、そして大晦日は友人と過ごすのが一

般的なのだそうです。私の留学先であるエアランゲン大学のドイツ人の学生友達も、クリスマスは実家に帰省し、大晦日までには再び皆エアランゲンに戻ってきて、友達と大晦日パーティーをして一緒に花火をして過ごしたそうです。

カルチャーショックは一般市民の生活の中だけでなく、学生生活を送っていても感じる場合があります。こちらの学生というかドイツの若者は、日本の若者に比べると、自立心が強いとすることが多々あります。たとえば自転車がパンクしたとき。日本では、大抵の人がすぐに自転車屋にもって行って修理してもらいましょう。事実、私も他の日本人留学生もそうでした。しかし友人のドイツ人学生にそれを言うと、自転車のパンクくらい普通自分で直すだろうと言われました。また、授業の発表時など。こちらでは教師も学生も皆パワーポイントを使えることが当たり前で、発表では大抵パワーポイントを使用します。その教室にパソコンがない場合は、わざわざ自分のノートパソコンを持ってきていました。日本でもパワーポイントを使っただけの発表はありましたが、このように皆使えることが当たり前、というまでにはなっていないように思います。

こちらで様々な経験をして、五か月前の自分と現在の自分、何か変わったか、成長できたかと問われれば、未だ確固たる実感はありません。むしろ果たして自分は成長できているのだろうか、ドイツ語能力は上がっているのだろうかと不安になり、伸び悩んでいる時期です。ドイツに滞在できるのは残るところ約半年。ちょうど留学の分岐点に差し掛かったところです。勉強面でも生活面でも、カルチャーショックを乗り越えてドイツの良いところを見習い、もっと成長したいと願う今日この頃です。